

岩手医科大学歯学会第9回総会抄録

日時：昭和58年11月26日（土）午前8時55分

会場：岩手医科大学歯学部大講堂

演題1 ラット顎下腺のアンドロゲン・レセプターについて

○根本 孝幸, 佐藤 詔子, 根本 優子
客本 斉子, 太田 稔

岩手医科大学歯学部口腔生化学講座

目的：androgen 依存性器官であるラット顎下腺について [^3H] dihydrotestosterone (DHT) と合成アンドロゲン ([^3H] R1881) とにより receptor assay を行い receptor の性状について検討した。方法：雌雄ラット Wistar 系ラット（8—10週齢）を用いた。内因性 androgen を除去するために、雄については去勢15—20時間後に実験に用いた。顎下腺を4倍容(W/V)の50mM Tris-HCl(pH7.5), 1mM EDTA, 20mM Na_2MO_4 , 5mM DFP, 10% glycerol でホモジナイズ後, 19,000 xg で, 30分間遠心し上清に細胞質を得た。ホルモンの結合は dextran coated charcoal 法によって測定した。結果：ラット顎下腺細胞質と [^3H] R 1881 結合の解離定数と結合部位数は雄で $K_d=3.6$ nM, NBS=66 fmol/mg protein, 雄で $K_d=2.5$ nM, NBS=159 fmol/mg protein であり, 解離定数に大きな差はなかったが, 結合部位数は雄より雌が2.4倍多かった。 [^3H] DHT の細胞質との結合量は合成アンドロゲンよりむしろ少なく, また1時間以上反応すると結合量は減少したが, これは細胞質に存在する 3α -hydroxy steroid dehydrogenase により DHT を receptor に結合できない androstanediol に代謝してしまつたためと考えられた。なお, この酵素活性には雌雄差があり, 雌で高活性であった。細胞質の [^3H] R 1881 結合に対する各種 steroid hormone の阻害の強さは $\text{DHT}=\text{testosterone}>\text{cortisol}>\text{estradiol}$ の順であり, 結合は androgen に特異的であった。低イオン強度下での receptor の沈降定数は雌雄とも 8 S であり前立腺など他の androgen 依存性器官の receptor と同様であった。 結語：ラット顎下腺細

胞質には androgen に高親和性で特異的に結合する receptor が存在し, その性質は雌雄で類似していたが, その結合活性には性差がみられ, 雌でむしろ高活性であった。

演題2. 正常唾液腺および唾液腺腫瘍組織内のアミラーゼの局在に関する免疫組織化学的検討

○島山 節子, 佐島 三重子, 鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

唾液腺腫瘍のなかで漿液腺房細胞への分化を示す腫瘍はごく僅かであるとされ, 最も多彩な組織型を呈する多形性腺腫においてさえ, 腫瘍組織内に漿液細胞の形態が認められるか否かは明らかにされていない。そこで私たちは漿液細胞の機能的マーカーとしてアミラーゼを選び酵素抗体間接法によって正常唾液腺および唾液腺腫瘍組織内のアミラーゼ含有細胞の局在を検索し, 次の結果を得た。材料は過去14年間に当講座および本学医学部臨床病理でとり扱われた病理組織検査標本で, 多形性腺腫21例(耳下腺5, 顎下腺9, 口蓋部7), oxyphilic adenoma 1例(耳下腺), monomorphic adenoma, other type 1例(口蓋), 粘表皮腫9例(耳下腺2, 口蓋部2, 頬部1, 口底部2, 白後部2), 腺様嚢胞癌10例(耳下腺2, 顎下腺5, 口蓋部2, 白後部1), 腺癌1例(頬部), 未分化癌2例(頬部)の45例である。正常唾液腺は多形性腺腫や粘液瘤などとともに摘出され, 組織学的に正常とみなされたもので耳下腺5例, 顎下腺7例, 舌下腺2例, 小唾液腺として口蓋腺9例, 頬腺9例, 白歯腺2例, 口唇腺6例を用いた。各材料は10%ホルマリンにて固定後, 通常のパラフィン包埋を行い 4μ の薄切切片にして用いた。免疫組織化学染色法は, 一次血清として Nordic 社の抗ヒト唾液アミラーゼ兔血清を, 2次血清としてペルオキサンダーゼ標識抗兔 IgG ヤギ血清を用いて酵素抗体間接法にて行った。対照標本は一次血清の代り